

通級による指導における「ある」と「なる」

企画者	原 広治（島根大学） 牧野 泰美（国立特別支援教育総合研究所）
司会者	原 広治（島根大学）
話題提供者	安部 満明（松江市立古志原小学校） 森 章子（神戸市立西落合小学校 こうべ学びの支援センター巡回相談員） 松原 洋司（大田市立静間小学校） 万年 康男（長野県稲荷山養護学校）
指定討論者	牧野 泰美（国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS: 通級による指導のこれまで 通級による指導のこれから

【企画趣旨】

これまで私たちは、「通級による指導のむこうにある大切なもの」をテーマに6回のシンポジウムを行い、毎回視点を変えながら、通級による指導を通して子どもに何を育てることが大切なのかについて議論するとともに、その通級指導という営みを、保護者(家族)や通級担当者といった大人側の成長にもつなげることについて言及してきた。

本シンポジウムではそこでの議論を踏まえながら、通級による指導で行ってきたこれまでを振り返り、今「ある」ものを整理しながら、これからの通級による指導の「なる」にむけた検討を進めるものである。通級による指導の制度の創設、対象となる障害種の拡大、対象者や担当者の増大、まもなく始まる高等学校での通級による指導等々、様々な変化のなかで、子どもの成長にとって重要な役割を担う通級指導教室ではどのような実践を展開していくのか、そしてそこにはどのような可能性が潜んでいるのかについて明らかにしていく。なお、今回は特に初等教育段階での通級による指導について議論し、中等教育段階については次回と考えている。

これまでのシンポジウムで議論してきたことをまとめると、次のようになる。

◇ 通級による指導を利用する親子にとって、子どもが素でおられる通級指導教室であることによって、子どもには「自己信頼（自信）」「他者信頼」「自分らしさの受け止め」を育み、家族には「その子と共に生きることを喜び、かつ、自分の人生を生きることを楽しむ」ことをその身に沈殿させていくことが大切である。

◇ そのためには、「心」を育てる関わりやその評価、相手を受け止める肯定的まなざし、与える・させる意図の強い指導ではなく、行動や能力の背景にある子どもの思いや願いを大切にしておくことが重要である。

◇ しかし、関わり手には「それはわかっているんだけど、どうすればいいのかわからない」「そんなことは前提で、それを踏まえて、能力を伸ばす、苦手を改善・克服する、できることを増やすことが大事……」という意識が強い。また、子どもの心の育ちは重要でありそれは前提であるとする教育実践が、実は子どもの「できにくさ(能力)」に注目しその改善が主な指導・支援の中身となっており、結局のところ、自己肯定感や自信、信頼といった子どもの心の育ちにつながる関わりでない場合が多い。

◇ 関わり手が前提として理解しておくのはむしろ指導・支援の方法であり、それらを手段に肯定的自己観等の子どもの心を育み、自己概念を形成しながら主体的に生きようとする子どもを育成していくことが教育の営みであり、それが子どもの最善の利益につながる。

◇ さらに、指導・支援を深めていくには、他者や他機関と、これまで述べてきた視点の共通理解を図りながら連携し、指導・支援をつむぐことが重要である。

今回は、教職経験が豊富で通級指導教室担当の経験のある4氏から、通級による指導で、「これまで」何をしてきたのかと、「これから」何をしようとしているのかについて、その在り方にとどまらず、そのための実践の具体について話題提供していただく。その後、指定討論者をまじえて議論を深め、通級による指導の「ある」と「なる」にせまりたい。

【話題提供者及び指定討論者の発言要旨】

話題提供 1：安部 満明

長年通級による指導に携わり、県内外の通級指導教室を牽引してきている。また、総合病院での言語発達外来を担当し、他分野から教育を考える経験をもつ。今回は、指導・支援に係る「医療モデルと教育モデル」を念頭に、通級による指導の「ある」と「なる」について述べる。

話題提供 2：森 章子

特別支援学校や通級指導教室担当教員として活躍し、最近までは教育行政担当者として、主に教育相談にも携わってきた。今回は、「障害の状況の改善・克服とあるがままの受け止め」「治すと携える」といった通級担当者の障害の捉えを念頭に、通級による指導の「ある」と「なる」について述べる。

話題提供 3：松原洋司

通級指導教室や教育行政の経験があり、県内各地の教室担当者や研究会組織の相談役でもある。現在は学校管理職として、特別支援教育を重要な柱に位置づけた学校経営を展開している。今回は、教育を営む上での「目的と手段」を念頭に、通級による指導の「ある」と「なる」について述べる。

話題提供 4：万年康男

これまでの通級指導教室や特別支援学校でのユニークな実践のほか、言語聴覚士の養成に携わりながら取り組む、ライフステージを意識した支援には定評がある。今回は、「能力促進と関係発達」「能力の獲得と能力の使用」を念頭に、通級による指導の「ある」と「なる」について述べる。

指定討論：牧野 泰美

4氏の話題提供を踏まえながら、(特に初等教育段階での)通級による指導の在り方と取組の重点を再確認(再定義)するとともに、そのための通級指導教室担当者の関わりについて整理、考察する。また、そこで得られたキーワードは、次回予定する中等教育段階での通級による指導における「ある」と「なる」の議論と関連づける。

(HARA Hiroji, MAKINO Yasumi, ABE Mitsuaki,
Mori Syoko, MATSUBARA Yoji, MANNEN Yasuo)